

夢のかけ橋

—ジョセフ・彦ものがたり—

竹田道子・著

高田 勲・絵





NDC913

竹田道子

夢のかけ橋 ——ジョセフ・彦ものがたり——

竹田道子作 高田勲絵

国土社 1988

163 P 22cm (現代の文学・24)

ゆめ
夢のかけ橋

——ジョセフ・彦ものがたり—— 〈現代の文学・24〉

1988年12月20日 初版1刷印刷

1988年12月25日 初版1刷発行

著者 竹田道子

発行者 鈴木正明

発行所 株式会社 国土社

〒122 東京都文京区目白台1-17-6

☎03(943)3721(営業) (943)8051(編集)

印刷所 株式会社 厚徳社

©竹田道子／高田勲

ISBN4-337-20524-1 C8391

夢のかけ橋

——ジョセフ・彦のものがたり——

竹田道子著

高田 勲絵



もくじ

第一章 嵐の前^{あらし}

栄力丸^{えいりきまる} 5

し、け 12

救助 22

オークランド号 26

第二章 希望の嵐^{きぼうあらし}

サンフランシスコ 35

めぐりあい・トマス 42

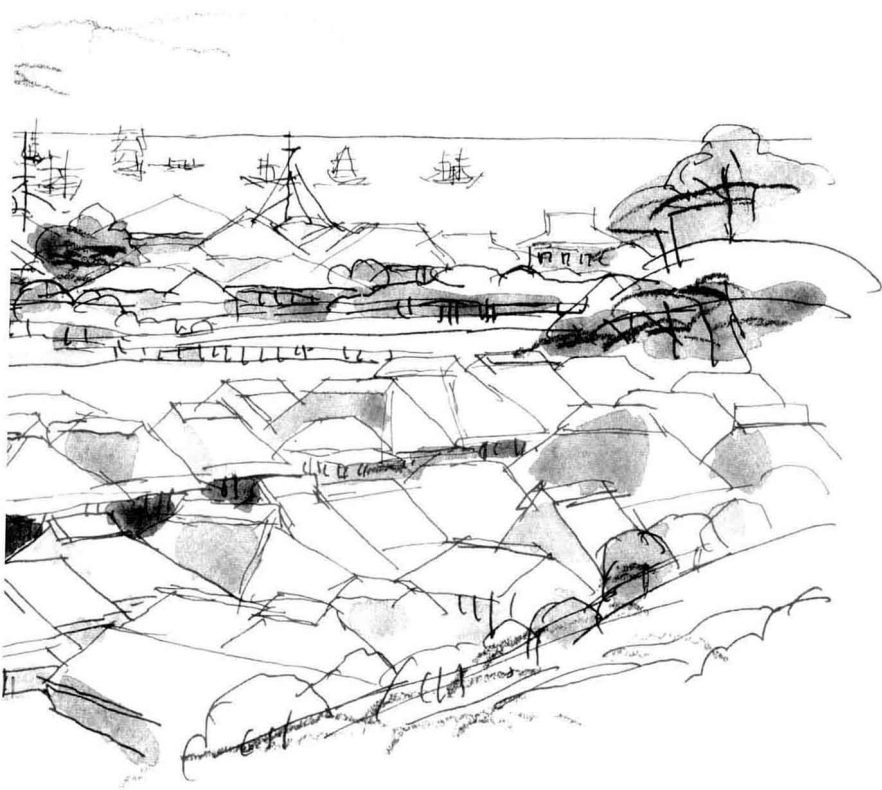
ふたたびアメリカへ 44

はじめての通訳^{つうやく} 51

めぐりあい・サンダース 55

めぐりあい・

グインとブルック 66



わかれ 72
帰国 77

第三章 嵐の後

おお、祖国！ 86

領事官通訳 92

再会 98

暗殺の季節 103

三度アメリカへ 110

『漂流記』出版 117

海外新聞発行 127

ヒコの民主主義 136

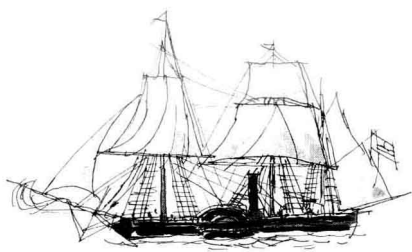
THE NARRATIVE
OF
A JAPANESE 148

あとがき 162



明治初年の
横浜居留地

鳥居



著者・竹田道子(たけだ みちこ)

1926 年，兵庫県に生まれる。日本児童文学者協会会員，同人誌「こうべ」の会所属。主な著書に『人形の寺』『ゆうれいをつかまえろ』『父のさじ』『銀のさじ』ほかがある。

住所／神戸市須磨区天神町 3 丁目 4 -17

画家・高田勲(たかだ いさお)

1938 年，島根県に生まれる。日本美術家連盟会員。主な作品に、『命をみつめて』『音の旅人』『大地震が学校をおそった』『多摩川とやさしい仲間たち』『ふしぎなトーチの旅』など。

住所／東京都立川市柏町 1 -28-12

装丁＝山本利一

第一章 嵐の前^{あらし}

栄^{えい}力^{りき}丸^{まる}



嘉永三年（一八五〇年）

○数年前から外国船が日本近海にひんびんとあらわれるようになっていた。アメリカのピツドル提督^{ていとく}のように、浦賀水道^{うらが}にきて通商を打診^{だしん}した例^{れい}もある（一八四六）。

○オランダ風説書^{ふうせつがき}（長崎へ来るオランダ船のもたらす世界^{せかい}状況^{じょうきょう}、鎖国^{さこく}日本の唯一^{ゆいいつ}の海外情報^{かいがいじほう}）は、アメリカ・イギリス二国が通商をもとめて近く来日するといふ情報を伝えている。

○朝廷^{てうてい}は、七社七寺に外敵追放の祈禱^{きとう}を命じて、海防^{みこくり}の勅^{ちく}を幕府^{ばくふ}に下した。

○幕府は海防掛に機密^{きみつ}がもれないように戒告^{かいこく}し、長崎からはいつてくる洋書の点検をきびしくし、許可のない訳書^{やくしよ}を禁^{きん}じた。

「いつまでこの港におるんじやろ」

空をあおいで、彦太郎はため息をついた。九鬼（三重県）の港での風待ちも今日で三日になる。

少年ははやくも退屈（たいくつ）しきっていた。

水主（水夫）たちは、甲板（かんぱん）の陽だまりでぼろのよう（い）に眠り（ねむ）こけている。すべては風しだいの帆船（はんせん）の航海、夜どおし死にもぐるいで働かねばならぬときが、いつやってくるかも知れない。そんなときにそなえての寝だめ、食いだめは、彼らの特技（とくぎ）なのだ。

さつきまで彦太郎の話し相手をしていた若い水主も、ふなべりにもたれてこっくりこっくりいねむりをはじめた。

彦太郎は、この樽廻船（たねかきせん）（大型の貨物船）住吉丸（すみよしまる）の船頭（ふなかし）（船長）吉左エ門（きちざえもん）の末息子（すえむすこ）である。この航海は、彦太郎にとってはじめての江戸行きであった。

兵庫（ひょうご）の港を出てから、淡路（あわじ）と泉州（せんしゅう）（いまの大阪府）のあいだの瀬戸（せと）を越すまでは、まあ内海である。それから紀州（きしゅう）（いまの和歌山県）の山やまにそって南下するにつれ、だんだんに外海らしくなり、千五百石（こくづ）積みの大船は、三十反余（たんほ）の木綿帆（ちめんほ）いっぱいに風をはらんで、波をけたてて小気味（こきみ）よく帆走（はんそう）した。潮岬（しほのみさき）から熊野灘（くまのなだ）へ、そして九鬼の港へ。

「とりかじよう！」

「ようそろ！」

風につて聞こえる海の男たちの勇ましいかけ声、少年の血をたぎりたたせるのに十分な六日

間の船旅であつた。

——じつと風を待つのも、船頭の勇氣じやと、おやじ、いつもいうていたが——

ふなばたにもたれて大あくびをしている彦太郎の頭の上から、吉左エ門の声がした。

「おい、彦よオ、栄力丸へ行ってみんけ」

さつき、仲間の樽廻船栄力丸が風待ちに入港してきたばかりである。栄力丸の船頭万蔵は、吉左エ門と同じ播州（兵庫県）古宮の出身、年恰好もおなじのごく親しい仲である。その上、どちらの船も、持ち主は灘の松屋の一族、親戚どうしであつた。

「あつちや新造船のピッカピッカじゃぞオ」

父のことに、好奇心のかたまりのような彦太郎は、一も二もなくとびついて、あとについていった。

「まあ、こんどは江戸見物かたがた、船乗りちゆうもんを見せちやろ、ついでに涙もふつとばしたれ思つてな、つれてきましたんや」

彦太郎の母親は、この春急死したばかりであつた。

「彦どん、そいつはありがたいことやのう」

いとおしそうに、万蔵も彦太郎をかえりみた。

たつてえな、な」

と、母親にたのみこんでくれた。あんなに船をきらつていた母親だが、金毘羅神（航海安全の神）まいるのさそいには勝てず、しぶしぶながら彦太郎の初旅をゆるしたのだった。

ところが、そのあと、客のぞみで、宮島、岩国、瀬戸内の島じまが追加され、けつきよく五十六日もの長旅になった。古宮から出たことのなかった彦太郎は、見知らぬ土地をめぐる楽しさにむちゆうであつた。

しかし、この思いがけない長旅の心労が、母親にはこたえたものか、ぶじな顔を見た翌日、卒中でたおれ、あつけなく亡くなつてしまつたのである。

「おやじも兄貴も海の上、まだ十三や四の彦どんがひとりでとむらいを出しよつた、けなげなもんやいうて、村ではえらい評判でんがな」

と、万蔵がいつた。

「それがいじらしゆうてなあ」

と、吉左エ門がいつたとき、新しい帆柱をみあげみあげ、彦太郎がもどつてきた。

「おい、彦どん、どないや？ この万蔵じいの船にのつてみんけ？」

「そうじや。新造船やぞ。めつたにのれるもんやないでえ」

吉左エ門もつかいかい半分でいつた。

「うん、さつき次作兄じさくあにやんからもさそわれてん……よっしゃ。おれ、こつちやの船にのせてもら
うわ」

あつさりいいきる彦太郎ひこたろうに、吉左工門きちざえもんのほうがあわてて、

「これこれ、今のはじょう談だん、じょう談だん」

と、手をふった。

「まだろくすつろくすつぼ役やくにもたたん子どもを。みなみなの衆しゅうの足手まといじゃ」

「ほうが、のるか？ 吉さん、おやじの船であまえとるより、ええかもしれんでえ。こつちやだ
んない、だんない（かまわない）」

万蔵まんぞうの方もあつさりその氣になつてしまった。

「それにな、彦どん、こつちの船の方が、おやじさんの船より一足先に江戸えどへつくんじや」

「ほうか。うん、おとつあん、ええやろ？ な、な」

こうして、まるでとなりの家へとまりにいくような氣がするさで、彦太郎ひこたろうは栄力丸えいりきまるにのりうつつ
てしまった。

父親のたつての願いで、彦太郎には炊かしぎの仙太郎せんたろうの下働したうきという仕事があたえられた。炊かしぎと
いうのは炊事すいじ、洗濯せんたく、掃除そうじ、何でもやらされる水夫見習いのことである。

人なつっこくてだれとでもすぐ仲なかよくなるし、見るものきくものに関心をもち、何をきかせて



も、

「へえ！ ほうかいなあ！」

と、くいいるようにきく彦太郎は、水主たちのうけもよく、とりわけ年の近い仙太郎や岩吉たちとは、たちまち仲よくなった。

みなは彦太郎とはよばず、村でよんでいたように、彦どん、彦どんとよぶようになった。

し、
け、

樽廻船の往きの積荷のおおかたは、灘の酒樽である。そこから樽廻船の名も出てきた。

栄力丸が江戸で荷下しする短かい停泊のあいだ、仙太郎らにつれられて、彦太郎は隅田川の河

口近い船着き場から上陸した。

屋並みのかなたに見える城やぐら、あれが江戸城ときいただけで、彼の胸はたかなった。浅草や亀戸あたりの人出におどろき、自分も江戸を見たのだと、十分満足した。

帰りは、浦賀で小麦、大麦、大豆、米、ほしか（雑魚を干した肥料）を積んだ。

浦賀水道を出るとき、入れちがいに住吉丸がはいつてきた。万歳にそれを教えられて、

「おーい、おーい」

と声をはりあげてよびかけてみたが、その声が義父にとどいたかどうか。

栄力丸が浦賀港を出たのが、嘉永三年十月二十六日（太陰曆）。三浦御崎、伊豆の石廊崎を過ぎ、御前崎から紀州の大島をめざして、遠州灘をいっきにつっきる海路をすすんだ。

二十八日の遠州灘には、二百隻以上の船が、南東の追い風をうけて、すべるように西へ向かって走っていた。天気、風向きともに絶好の航海日和だったのである。

しかし、大王崎沖をまわった二十九日の夜、宵にはとくべつよく見えていた星空が、みるみる墨一色に塗りつぶされた。と、思うまもなく四つ（午後十時）ごろからは、土砂降りの雨になった。その雨が風をよび、小山のような大波が、つぎつぎおそってきた。帆をたたみ帆柱だけが高くそりたつ船は、大波にゆりあげられては、奈落につきおとされた。

この航路の船乗りたちが、いちばんおそれている冬の季節風、大西風である。地方によつては、この風のことを「あなじ」とよび、へあなじの三日吹き」ということばがあるくらい。いったん吹きはじめると、なかなかやまないのが特徴であった。

おそるおそる外をのぞいて彦太郎は腰をぬかした。くろぐろとした山が目の前に立ちほだかり、つぎの瞬間、船におおいかぶさってきた。

ゴオーツ

彦太郎は船底にほうりだされた。つかまるまもなく、またほうり上げられる。仲間の水主たち

となどかぶつかり、などか共にころがった。なわの切れた積荷が床の上を走りまわった。

しけにはなれているはずの水主たちも、船酔いにのたうちまわりはじめた。が、すぐ船酔いどころではなくなってしまった。船がかぶった海水は甲板の板のすきまから容赦なく船底に流れこむ。この溜り水（アカ）をくみだす足ふみのポンプ（スツポンとよばれていた）ではとても追いつかず、全員が手桶でくみだすほかなくなったからである。彦太郎も胃がとびだしそうなき気に苦しみながら水をくみだした。

「（舵の）羽板がもぎとられたぞォー！」

という悲痛な声が、風にきれぎれになつてとんできた。

ついに積荷の半分を、海に投げこむことになった。荷物といつしよにころげまわるようなその作業のあいだにもなんと——あッ、船がひっくりかえる——と肝をひやしたことだろう。

みな、もとどり（まげのもとをくくったもの）を切つて払い髪（さんばら髪）になっていた。

伊勢神宮や金比羅宮の神々に祈る声や、念仏をとなえる声が、うめき声のようにきこえてくる。

巨大な帆柱もかたむき船は平衡を失ってしまった。万蔵は最後の断を下した。帆柱をたおす！

直径三尺（約一メートル）もある帆柱に、水主たちは入れかわり立ちかわり斧を入れた。ただ立っていることさえあやうい嵐の中で、この作業は大抵のことではなかった。小一時間ほどの格闘のすえ、帆柱は大音声をたてて海中へころげおち、やっと船は少し安定をとりもどした。

あととはたがいに力をあわせてアカをくみだし、沈没をまぬがれる努力をするばかり。このころからやや風は弱まってきたようである。

船酔いと疲労で、ひとりたおれ、またひとり……。

彦太郎は氏神の社で竹馬にのって遊んでいた。母親が鳥居のところで手招いている。はやくそこへとあせるのに、竹馬が思うように前に出ない。

「待ってえ！ おかあはん！」

彼はあせった。と、母親はきゆうにきびしい顔になり、手ぶりでもどれとどれとおしかえすしぐさをつづける。

「なんでやあ？ おかあはん！」

その自分の声でぽっかり眼がさめた。ぬけるように青い初冬の空。ぶるつとふるえあがった。ぬれたきものは、肌へばりついたまま乾いていた。

あたたかいものが、ほおにさわった。

「ニャーア」

「ふくか？ よう生きとったな」

船内のネズミとりのために飼われているネコである。だきあげた彦太郎の手をすりぬけて、ふ